

大東亜戦争参戦抄録

福島県 横山武夫

私は、大正三（一九一四）年二月十一日、紀元節の佳き日に、福島県耶麻郡熱塩加納村大字加納字根岸甲で生まれました。

昭和十八（一九四三）年十月一日、横須賀第一海兵団へ入団。

昭和二十一年八月十五日、復員、実家へ帰る。という事で大東亜戦争に参加出征した軍人です。

昭和十八年

- 九月 十日 召集令状交付
- 九月二十九日 出発、東京弟宅へ一泊
- 九月 三十日 片瀬町江の島旅館「洗心亭」集合、海兵団より出張入団

注意等

十月 一日 四時起床、朝食五時、電車で横須賀七時半着、六兵舎へ（第一海兵団）

十月二十四日 館山砲術学校へ。二カ月の猛訓練

十二月十四日 横一団へ

となった。私のこの入団当時の家庭の状況を述べます。家業は農業です。

- 父 農業 病弱
- 母 〃 健康
- 長男（私） 〃 〃
- 妹（長女） 〃 結婚
- 次男（洋服店） 〃 〃
- 妹（次女） 〃 結婚
- 三男 国鉄職員 〃 在東京
- 四男 会社員 〃 〃
- 五男 〃 〃 〃
- 妹（三女） 学生 〃 〃

と言った次第で八人の子供の十人家族でした。

私の海軍生活の労苦の始まりは入団第一目からの総員制裁です。海軍では団体の隊員の中の一人のミスや誤りを全隊員即ち総員に対して制裁があります。櫂の棒で長さ約一メートル半、直径約五センチの精神修養棒で尻を叩かれる。毎日ある。

私の場合は昭和十八年十月一日より昭和十九年一月十日まで毎日。もう話にならぬ位痛い。ひどい。じっと耐えて忍ぶのみである。痛さ、辛さ、苦しきに打ち勝つ海軍魂の養成である。難局を打開し、困苦欠乏に勝ち、最後の勝利をつかみとるために上官の愛の試練である。復員後社会に復帰し、何くそ！との負けじ魂 海軍魂で成功をものにして、幸福な人生、家庭を築いた人材は多い。総員制裁は大きな勝利の生みの親であった。

次は朝夕の釣り床の件。世に言うハンモツ

ク。毎日釣る、たたむ、その度毎の恐ろしい指導だ。私は水兵になったので、そのための独特の勉強が術、学とある。教える方は「二度言わないぞ」と厳しい。朝食前の体操、駆け足、入浴（尻が痛くて湯に入れない）、食事（栄養失調を防ぐ）。

私は三十歳で入団した。楽しみは家内が二人の子供を連れて来る面会である。痛さ、辛さを忘れさせてくれる。

隊員は一班に十五人位いる。半数は妻帯者だ。現役兵と比べると十歳年長だが、若い者に負けぬぞと皆励まし合って頑張った。また小隊は四十人位いたが、福島県人が多くいて心強かった。

館山の砲術学校では、十年式四十五口径十二センチ高角砲の教育を受けた。私は砲手の要員として第五十防空隊の教育を受けた。大空を飛んで来る敵機を撃墜するための学科もある。教官側は「二度言わないぞ」が口癖で

敵しい。特に横方向にとぶ敵機の敵速をよく理解して照準を合わせないと駄目。上官の発射命令、号令に従うのは勿論だが、また自分なりの判断、知識で補うことも多い。撃墜という戦果が目に見えぬと空しい気持ちになり叱られる。むずかしい戦いでした。やがて昭和十八年十二月十四日、学校を卒業して横一団へ帰りました。

昭和十九年一月十二日、横須賀を出て、一月十五日より呉海兵団へ移る。

一月二十日、「国山丸」で呉を出港、一月二十八日台湾の高雄入港。八湯上陸。

二月六日午後三時、仏印のカムラン湾で敵潜よりの魚雷攻撃を受けた。その時日本軍は輸送船十二隻位で船団を組み、海軍の駆潜艇一隻の護衛がついていた。魚雷を受けたのは「凶南丸」という昔の捕鯨母船の大きい船でした。飛行場設営隊が乗っていたそうです。

幸いにも沈没せず傾いたのみで最悪の事態はまぬがれました。

二月十日、サイゴンのサンジャック港へ仮泊入港する。二月二十二日、ジャワのスラバヤ軍港へ。上陸許可される。給料として初めて二十円を支給された。嬉しかった。三月二日、スンバ島着。母港ワインカップ港に午後五時五十分入港。

やがて昭和二十年八月十五日、終戦となる。スンバ島よりジャワ島へ撤退する。イギリス軍による武装解除を受けた。さすがにジェントルマンの国だけあって、感服させられること多し。がしかし一部の兵が私達の時計、万年筆を略奪した。イギリス軍への敬意は消えた。

やがてオランダ軍と交替した。私達の仕事は乳牛の乳しぼり、草刈り、清掃等であった。

やがて待ちこがれた帰国である。昭和二十一年八月十五日、終戦より丸一カ年後、実家

へ帰還。家族は皆元気で、喜んで迎えてくれた。

私は三十歳で入団した。結婚は昭和十三年三月三十一日でした。子供は一男三女で、皆元気。私の戦後は農業委員、農協役員、神社や寺の総代等を歴任して現在はまだ九十歳。隠居です。

抑留の屈辱に耐えて

福島県 猪俣 傳

大正九（一九二〇）年十二月二十七日、父傳一の長男として生まれ、姉二人、妹一人、弟一人の五人兄弟として幼少時を過ごしました。家は中程度の農家で、米作りと薪炭を作っていました。

父が近衛兵の軍人として過ごしたことから、折にふれて話してくれた軍隊当時の様子を子供の頃から聞かされ、また写真なども見せられて兵隊当時の父の姿がとても立派に見えて、自分も早く大きくなつて父のように近衛兵となれたらよいと思いつづけておりました。

昭和十（一九三五）年三月、熱塩村尋常高等小学校高等科を卒業し、さらに中学校に行きたいと父に話したところ、今十一人の家族をかかえ大変な時にとても中学校などにはやれないと言われ、止むなくあきらめて青年学校に入り勉強しました。